多賀城市文化財調査報告書第56集

高崎遺跡 ほか

山王遺跡　市川橋遺跡

東田中窪前遺跡　稲荷殿地区

平成11年3月

多賀城市教育委員会

序　　文

現在、多賀城市内には10万年前に人間が生活していた痕跡を示すものが出土しており、縄文・弥生時代を経て現在まで連綿としてその歴史を展開していたことを論証できる遺跡が数多く分布しています。これらの遺跡は、人類が歩んできた歴史の足跡であり、当時の生活文化を認知し、将来の文化創造へのヒントを得ることができる重要な資料であることはいうまでもありません。そして、このようなかけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達現代に生きる人々にとって重要な責務であると考えております。

近年、そうした遺跡を中心とする文化財全般にわたって、開発の波が押し寄せていることは否めません。このことから、文化財の保護・継承と開発の問題は行政上の重大な課題になってきています。

本書は、市内で年間90件以上あった届出のうち、保護行政上の指導を行いながらも、発掘調査を実施せざるをえなかった平成８・９年度に市費事業として行った調査成果の報告です。本報告書が文化財関係者のみならず、多少なりとも市民の皆様の文化財に対する普及・啓蒙の一助となれば幸いと考えます。

最後に、遺跡の保存に理解を示され、調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

多賀城市教育委員会

教育長　櫻　井　茂　男

例　　言

1．本書は平成６・８・９年度に実施した４遺跡・９調査の成果をまとめたものである。

2．遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連番号である。

3．本書中の遺構の分類記号は次のとおりである。

ＳＢ：建物　ＳＩ：竪穴住居　ＳＫ：土壙　ＳＤ：溝　ＳＸ：その他

4．調査区の実測基準線は「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定している。

5．挿図中の高さは標高値を示している。

6．土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原）を参照した。

7．本書の執筆は、Ⅰが武田健市、Ⅱ・１が武田、２が高橋圭藏、Ⅲ・１・２が石川俊英、３が高橋・車田敦、Ⅳが鈴木孝行、Ⅴが高橋、編集は、担当者全員が協議し高橋が行った。

8．調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

9．高崎遺跡については、第20次調査と第24次調査が隣接する地域であるため、両調査の報告を続けて掲載した。そのため、調査次数と報告順序があっていないことを明記しておく。

目　　次

Ⅰ．山王遺跡　第31次調査……3

Ⅱ．市川橋遺跡……5

1．第16・20次調査……5

2．第22次調査……7

Ⅲ．高崎遺跡……8

1．第20次調査……8

2．第24次調査……12

3．第23次調査……17

Ⅳ．東田中窪前遺跡　第２次調査……22

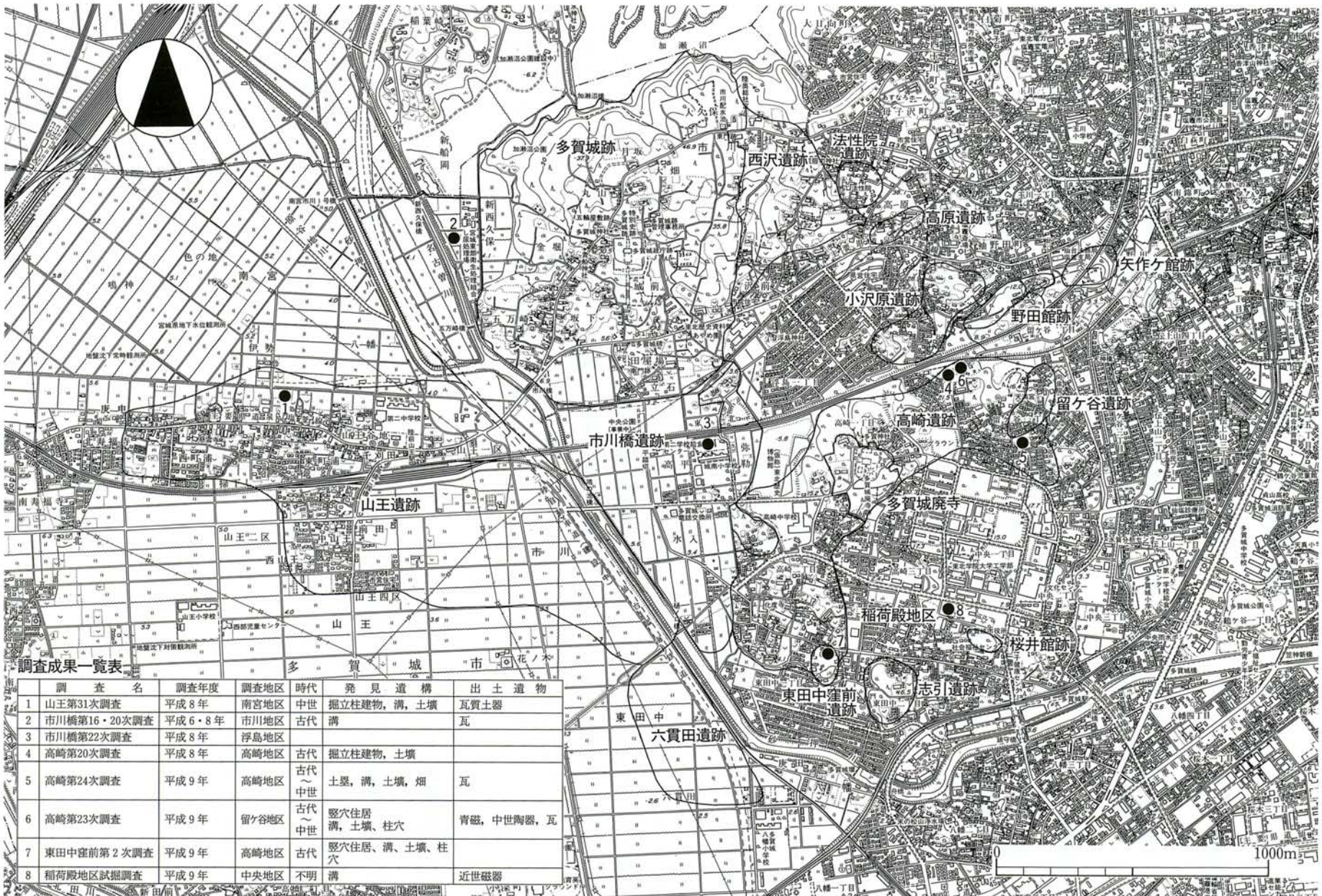
Ⅴ．稲荷殿地区試掘調査……24

調　査　要　項

調査名	所在地	調査面積	調査期間	調査員	調査名	所在地	調査面積	調査期間	調査員
山王遺跡 第31次調査	南宮字伊勢 214-1 他３筆	150㎡	平成８年11月29日 ～12月13日	武田健市 高橋圭藏 山川純一	高崎遺跡 第24次調査	高崎一丁目 117-3	300㎡	平成９年10月23日 ～12月５日	石川俊英 山川純一
市川橋遺跡 第16･20次調査	市川字新西 久保地内	200㎡	平成６年９月26日 ～10月31日 平成８年５月７日 ～６月７日	武田健市	高崎遺跡 第23次調査	留ケ谷一丁 目320-１ 他４筆	302㎡	平成９年５月７日 ～６月５日	高橋圭藏 車田　敦
市川橋遺跡 第22次調査	浮島字高原 51地内	280㎡	平成８年10月７日 ～29日	石川俊英 高橋圭藏	東田中窪前遺跡 第２次調査	高崎二丁目 1-6	14㎡	平成９年５月20日 ～29日	鈴木孝行 山川純一
高崎遺跡 第20次調査	高崎一丁目 117-10・11	200㎡	平成８年10月28日 11月20日	石川俊英	稲荷殿地区 試掘調査	中央二丁目 地内	200㎡	平成９年10月21日 ～27日	高橋圭藏 山川純一

調査参加者

赤井ひろ子　赤間かつ子　浅野眞　芦野しづ子　阿部胞吉　阿部敏子　阿部弘　伊藤正直　遠藤一代　遠藤実　大竹重次郎
大友良子　大山貞子　小笠原マキ子　長田栄太郎　小野玉乃　小野寺恵子　加藤昭一　加藤正士　菅野恵子　熊谷きみ江　熊谷サツキ
後藤恵子　小松吉男　今野和子　今野孝男　佐々木軍治　下道博信　菅原絹代　菅原吉明　鈴木太仲　鈴木寿二　大道寺勉
武田みつ子　武田りき　武山あや子　田中ミヨ　千葉享一　角田静子　手嶋與美　南城美岐子　福永孝二　星光治　松岡美津枝
松本喜一　真野勝雄　水越朝治　宮川ハルミ　矢萩栄四郎　山田国子　山田弘子　渡辺正一　渡辺ひで子　渡辺幹子



調査成果一覧表

	調査名	調査年度	調査地区	時代	発見遺構	出土遺物
1	山王第31次調査	平成8年	南宮地区	中世	掘立柱建物，溝，土壙	瓦質土器
2	市川橋第16・20次調査	平成6・8年	市川地区	古代	溝	瓦
3	市川橋第22次調査	平成8年	浮島地区			
4	高崎第20次調査	平成8年	高崎地区	古代	掘立柱建物，土壙	
5	高崎第24次調査	平成9年	高崎地区	古代～中世	土塁，溝，土壙，畑	瓦
6	高崎第23次調査	平成9年	留ケ谷地区	古代～中世	竪穴住居 溝，土壙、柱穴	青磁，中世陶器，瓦
7	東田中窪前第2次調査	平成9年	高崎地区	古代	竪穴住居、溝、土壙、柱穴	
8	稲荷殿地区試掘調査	平成9年	中央地区	不明	溝	近世磁器

第1図　調査区位置図

＜遺 跡 の 概 要＞

山王遺跡

山王遺跡は、多賀城市山王、南宮の両地区を中心とする東西約２㎞、南北約１㎞の広範囲にわたる遺跡である。本遺跡では、弥生時代から近世にわたる遺構、遺物をこれまでの調査で発見している。

市川橋遺跡

市川橋遺跡は、多賀城市のほぼ中央部に位置し、市の中央よりやや西側を南北に流れる砂押川によって形成された標高２～３ｍの微高地から低湿地に立地している。本遺跡は北側で丘陵に接するように、東西1.4㎞、南北1.6㎞にわたって広がっている。本遺跡では、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物をこれまでの調査で発見している。

高崎遺跡

高崎遺跡は、一部低湿地も含んでいるが、大部分は沖積地に向かって枝状に発達した緩やかな丘陵上に位置している。本遺跡は多賀城市のほぼ中心部に所在し、南北約1.1㎞、東西約1.2㎞の範囲に広がっている。本遺跡では、古墳時代から近世に至る遺構・遺物を発見している。

山王・市川橋・高崎遺跡は、それぞれが隣接しており多賀城南面一帯に広がっている。近年の多賀城周辺の調査によって、この三遺跡から東西・南北方向に規則的に配された古代の道路の発見が相次いでいる。それらは、多賀城南門から南へのびる南北大路と、多賀城南辺築地に平行する東西大路をメインストリートとしている。そして、それらの道路で区切られた碁盤の目のようなまちの様子が次第に明らかになってきている。そこには陸奥守の邸宅や庭園のある邸宅、中・下級役人や庶民の家が立ち並んでいたと考えられている。

東田中窪前遺跡

東田中窪前遺跡は、塩釜丘陵の南西部に立地している。かつては土塁が存在したといわれており、中世の館跡と考えられている。また、奈良・平安時代の遺物の散布地としても知られている。第１次調査では、布掘りによる塀跡や溝跡が発見されている。このようなことから、隣接する高崎遺跡とともに古代から中世の複合遺跡ということができる。

Ⅰ．山王遺跡

第 31 次 調 査

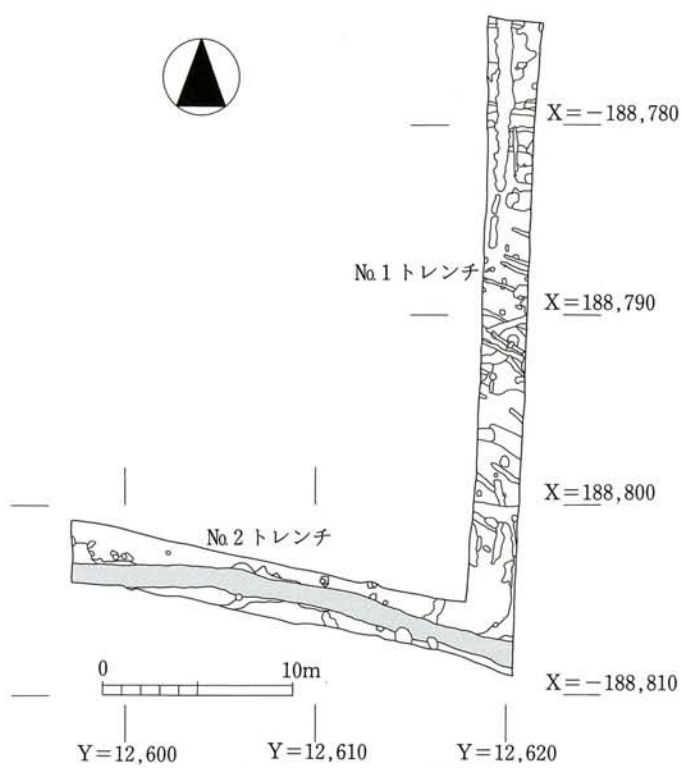
Ⅰ．調査区の位置

本調査区は山王遺跡の中央部やや北寄りに位置している。調査区の現況は畑であり、北側にひろがる水田地帯よりも一段高くなっている。本地区周辺では、県文化財保護課により県道泉塩釜線関連の調査が行われており、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が数多く発見されている（註１）。

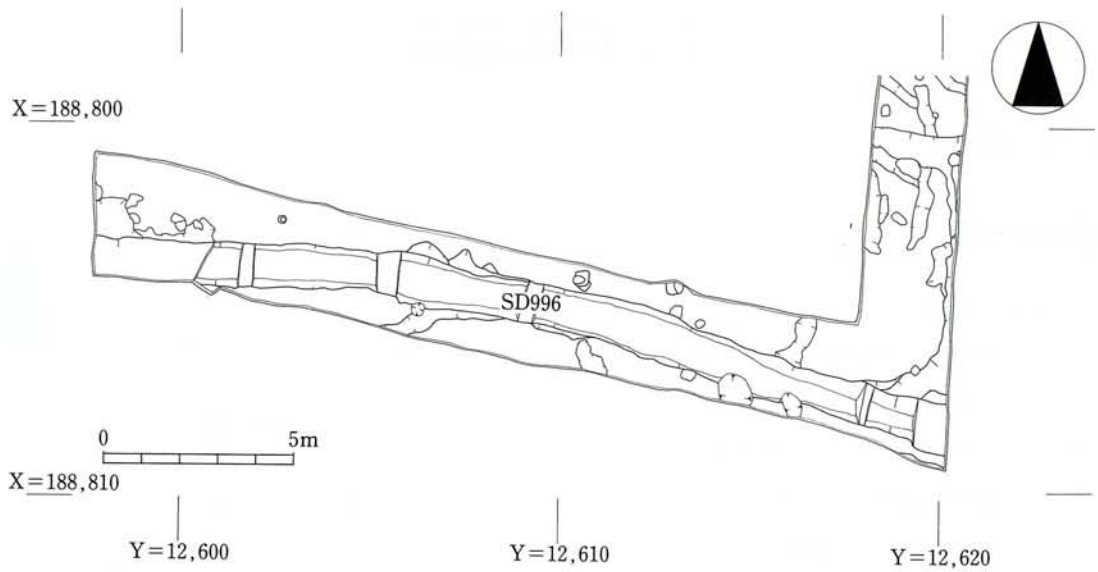
Ⅱ．調査に至る経緯

本件は、南宮公園のフェンス設置に伴う調査である。当初、確認調査で対応するとのことであったが、フェンスの基礎工事が現表土より約60cmほど掘削して行う計画であったため、遺構への影響が懸念された。そのため表土除去後にあらためて遺構検出面との高低差を計測し、影響がある場合は事前調査とすることで了解を得、調査を開始した。平成８年11月28日、フェンス基礎工事の範囲を確認し、南北・東西の調査区を設定した。便宜上、南北の調査区をNo.１トレンチ、東西の調査区をNo.２トレンチとした。11月29日、重機を使用して現表土の除去を行った。調査区全域の遺構面が確定したため表土との高低差を計測したところ80～120cmあることが明らかとなったため、確認調査で対応することが決定した。12月２日より作業員を投入して遺構の精査を開始(～12月11日)。12月４日、検出した遺構の年代を把握するため、一部遺構の堆積土の掘り込みを行った。12月５日、平面図作成のための基準点を設置し、1/20の平面図および部分的な断面図の作成。12月13日、調査区全体の写真撮影を行い、調査を終了した。

調査区位置図



第１図　調査区全体図

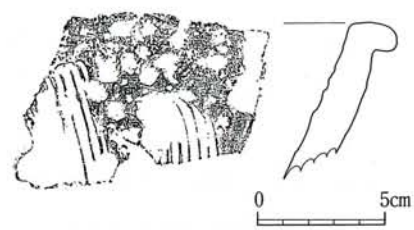


第２図　No.２トレンチ遺構配置図

Ⅲ．調査成果

No.１トレンチ

南北方向のトレンチである。近世以降の堆積土除去後に、トレンチのほぼ全面で東西方向の小溝を多数検出した。溝の幅は30cm前後である。遺物は堆積層から土師器、須恵器、染め付け磁器等が出土している。



第３図　SD996出土遺物

No.２トレンチ

東西方向のトレンチである。近世以降の溝がトレンチ全体を覆っており、その堆積土除去後にＳＤ996東西溝をはじめ、土壙、小柱穴を検出した。遺物も堆積層を中心に土師器、須恵器、無釉陶器、瓦質土器、染め付け磁器、古銭等が出土している。

ＳＤ996…黄色砂質土の地山面で検出した東西方向の溝であり、両端は調査区外に延びている。同位置で２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）があり、今回はＢ期についてのみ堆積土の除去を行った。Ｂ期は長さ23m以上、幅約１m、深さ12～25cmである。堆積土は２層に細分することができ、共に黒色あるいは黒褐色粘土である。遺物には無釉陶器甕や瓦質土器擂り鉢がある。

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、ＳＤ996東西溝や多数の小溝などを検出した。前者は出土した瓦質土器の年代から15世紀以降の溝と考えられる。それ以外の遺構については検出したのみであるため、詳細は不明である。

註１　宮城県教育委員会・宮城県土木部　『山王遺跡町地区の調査』　宮城県文化財調査報告書第175集

II．市川橋遺跡

1．　第16・20次調査

Ⅰ．調査区の位置

本調査区は特別史跡多賀城跡の外郭西辺から50～100mの地点にある。調査区の現況は水田であり、市道名古曽線を挟んだ西側には、名古曽川が南流している。

Ⅱ．調査に至る経緯

本件については、市道名古曽線の拡幅に伴う事前調査である。第16次調査は平成６年９月26日～10月31日、第20次調査は平成８年５月７日～６月７日に行った。

Ⅲ．調査成果

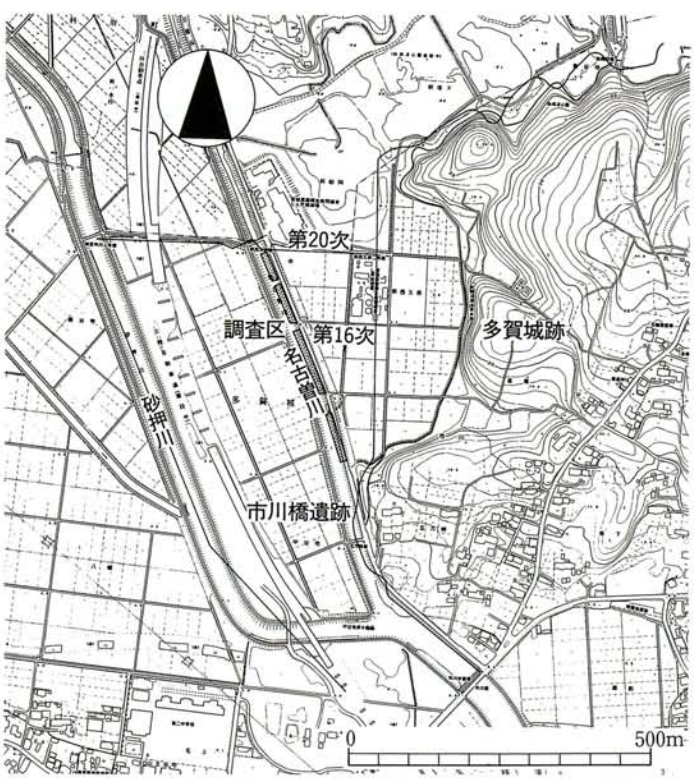
(1)　層序

本調査区内は以下の６層に大別できる。

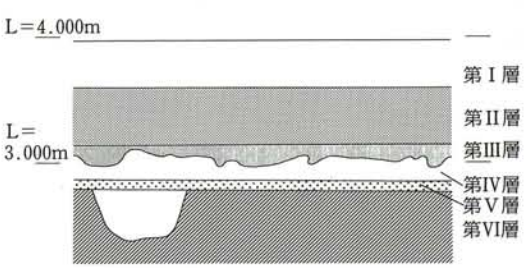
第Ⅰ層　現水田表土である。厚さは約50cmほどであり、酸化鉄を多量に混入している。

第Ⅱ層　黒褐色と黒色の泥炭層が互層に堆積する層である。厚さは40cmほどである。

第Ⅲ層　水田層である。オリーブ黒色粘土を主体とし、緑灰色土がブロック状に多量に混入する。厚さは20cmほどである。



第１図　調査区位置図



第２図　層序模式図

第IV層　緑灰色のシルト層であり、厚さは20cm前後である。

第Ⅴ層　10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰をブロック状に混入する泥炭層である。厚さは、約10～15cmである。

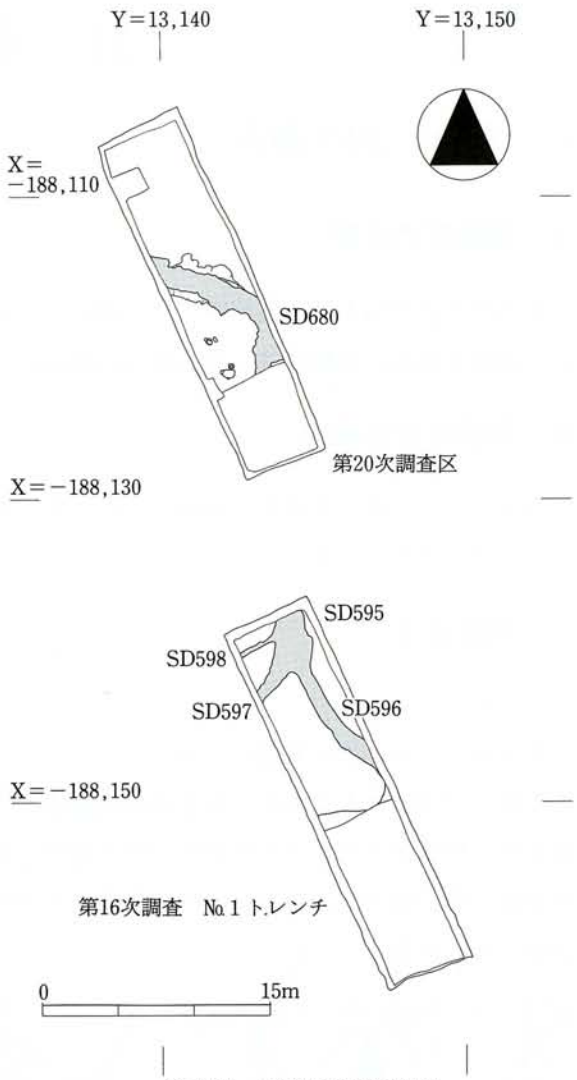
第VI層　緑灰色砂層である。№1トレンチの遺構検出面であるが、その他のトレンチでは遺構は全く確認されなかった。なお、第VI層下層については、部分的に深掘りを行った結果、砂層と泥炭層が互層に堆積する軟弱な層であることを確認した。

(2)　発見した遺構と遺物

第16次調査：溝4条を検出した。

ＳＤ595・596・597・598溝

第VI層上面で検出した一連の溝である。長さは南北方向のＳＤ595･596を合わせると12m以上になる。上幅1～2m程であり、ＳＤ598のみ30cm前後と規模が小さい。深さは10～15cm程であり、北側に向かって傾斜している。埋土は黒褐色粘土が主体であり、底面付近で緑灰色砂層が若干混入する。出土遺物はない。



第3図　北端部遺構配置図

第20次調査：溝1条、ピット5個を検出した。

ＳＤ680溝

第VI層上面で検出した南北方向から東西方向へ屈曲する溝である。検出した層位・方向・埋土などから第16次調査で検出したＳＤ595と一連であると考えられる。長さは南北方向のものが5m以上、東西方向のものは7m以上である。上幅は1～1.5mであり、深さは40～48cmである。埋土は黒色粘土を主体としているが、底面付近では緑灰色砂層が多く混入している。出土遺物はない。

Ⅳ．まとめ

調査区北端部で溝を検出した。年代は、第Ⅴ層との関係より10世紀前葉以前と考えられる。

2. 第 22 次 調 査

Ⅰ. 調査区の位置

今回調査を行った場所は、市川橋遺跡の南東部、特別史跡多賀城跡から南東に約760mのところ、多賀城市浮島字高平地区である。当該地区は、既存の建物の西側に隣接するトラックの方向変換場と雑木林になっていた地域である。

Ⅱ. 調査に至る経緯

多賀城市第二学校給食センター増設工事が契機となり、発掘調査を実施した。

Ⅲ. 調査成果

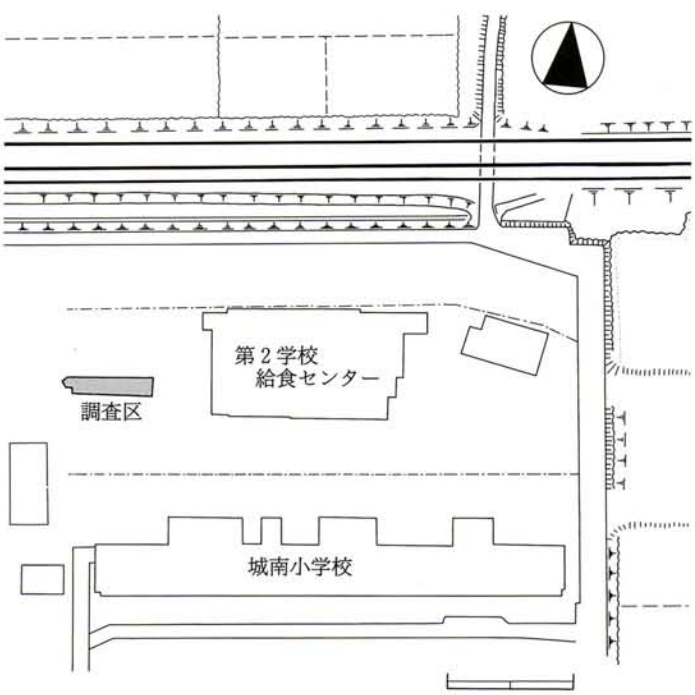
本調査区での土層堆積状況は、現地表面から1.5m下まで盛土されていた。盛土を除去すると黒色粘質土が表れ、さらにその下層では、砂と泥炭層の互層を地表下３mまで確認した。部分的な深掘りを行った結果、この層がさらに厚く堆積している状況が認められた。

遺構は発見できず、遺物についても土師器、須恵器の小破片が数個見つかったのみである。

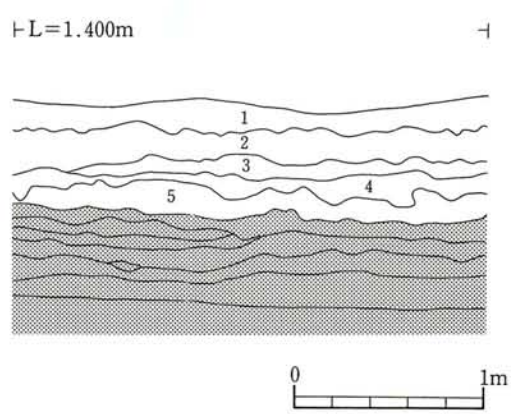
Ⅳ. まとめ

1　本調査区では、泥炭層が厚く堆積しており、遺構は発見できなかった。

2　過去の調査成果を見ると、平成５年度に当該区の西側約100mの地点、平成６年度に南側約170mの地点でそれぞれ発掘調査を行い、一面に湿地が広がっていることが明らかになっていた。本調査ではその湿地の延びが調査区内まで広がっていることを確認した。



第１図　調査区位置図



第２図　トレンチ南壁断面図

番　号	土　色	土　性
1	10Y R3/2黒褐	粘質土
2	10Y R3/1黒褐	粘質土
3	2.5G Y3/1暗オリーブ灰	粘質土
4	10G1.7/1緑黒	粘質土
5	2.5Y6/2灰黄褐	砂質土
アミカケ		砂と泥炭層の互層

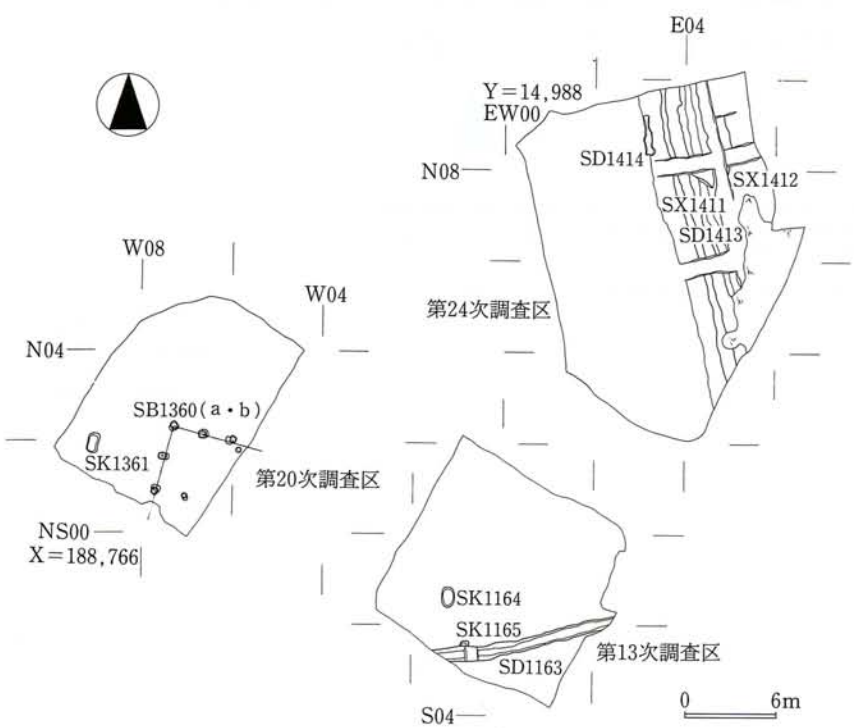
Ⅲ．高崎遺跡

第 20 次 調 査

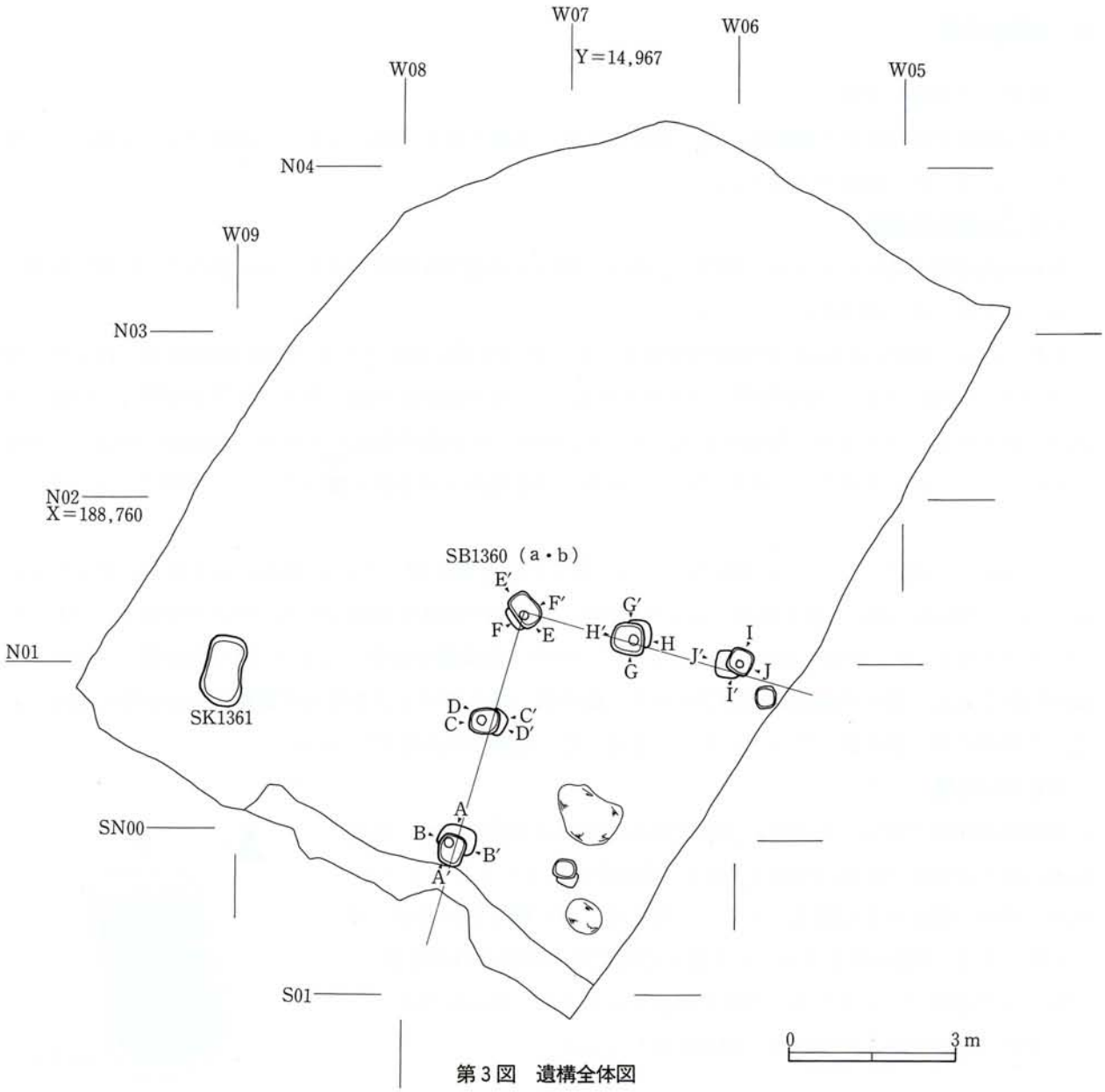
Ⅰ．調査に至る経緯

本調査は、個人住宅建築に係るものである。当該区は、高崎遺跡の範囲内に位置しており、隣接区では第13次発掘調査（平成６年度）を実施し、溝や土壙等を発見している。これらのことから事前調査が必要と判断し、これについて協議を行った。発掘調査は10月28日から開始し、作業員を動員して表土除去を行った。11月６日より遺構確認作業に入った結果、土壙や建物跡の柱穴と考えられる遺構を発見した。11月８日平面作成時に必要な基準点の設定を行った。土壙堆積土の掘り下げ、建物跡は新旧関係、規模や展開方向を把握する作業を行った。これらの遺構の写真撮影、土層断面図及び、平面図作成を行った後、11月20日調査対象区内の地形測量を行ってすべての調査を終了した。

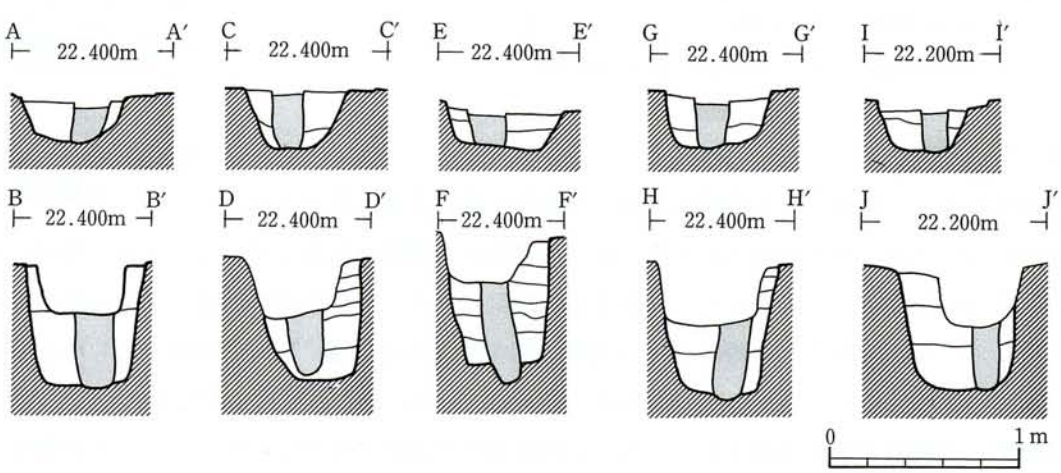
第１図　調査区位置図



第２図　遺構配置図



第３図　遺構全体図



第４図　柱穴断面図

Ⅱ．調査成果

(1)　発見した遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物１棟、土壙１基である。これらの遺構はすべて地山上で見つかっている。以下概要を説明する。

ＳＢ1360掘立柱建物

調査区南東側で発見した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物である。同位置内で二時期の変遷がある。以下古い順に説明する。

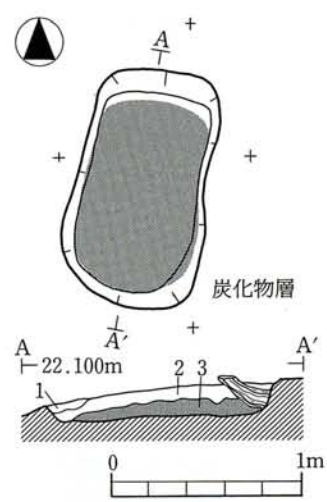
ＳＢ1360(a)　建物の方向は、西側柱列で見ると北で約11度東に偏している。柱間は北側柱列の西より2.02m・1.95mで総長3.96m、西側柱列の北より2.01m・2.27mで総長4.28mである。柱穴の規模は一辺40～60cmの方形を呈し、深さは20～35cmである。すべての柱穴で柱痕跡を検出しており、柱痕跡より径16～20cmの円形である。掘り方埋土は、地山ブロックを含んだ黄褐色土が主体となっている。遺物は出土していない。

ＳＢ1360(b)　建物の方向は、西側柱列で見ると北で約15度東に偏している。柱間は北側柱列の西より2.11m・1.87mで総長3.99m、西側柱列の北より2.04m・2.27mで総長4.30mである。柱穴の規模は一辺45～55cmの方形を呈し、深さは45～70cmである。すべての柱穴で柱痕跡を検出しており、柱は柱痕跡より径16～21cmの円形である。掘り方埋土は地山ブロック、炭化物、焼土ブロックを含んだ黄褐色土が主体となっている。この中には一部互層になっているものもあった。遺物は出土していない。

ＳＫ1361土壙

調査区南西側で発見した方形の土壙である。規模は長辺1.25m、短辺66cm、深さは18cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。底面と壁の一部は赤変し硬化している。埋土は三層に細分されるが二層に大別できる。下層は焼土ブロックを含んだ炭化物が層状に自然堆積し、上層には炭化物ブロックを多く含んだ褐色土が人為的に埋め戻されている。遺物は土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。

番号	土　　色	土性・混入物
1	10YR6/8明黄褐色	地山土に類似
2	10YR4/4褐色	炭化物をブロック状に含む
3	10YR1.7/1黒色	焼土ブロックを含んだ炭化物が層状に堆積



第５図　SK1361平面図及び土層堆積状況

(2)　遺構の年代

今回の調査によって発見された遺構は、掘立柱建物１棟、土壙１基である。遺構の年代については、ＳＢ1360（ａ・ｂ）掘立柱建物から遺物は出土していないため、年代は不明である。次にＳＫ1361土壙について考えると、本遺構は北側をのぞいて壁や床面のほとんどは熱を受け、一部赤変し硬化している。このような特徴を持つ遺構は焼成に関わる施設に比較的類似するものと見られる。これと同じような性格を持つ遺構について類例を求めると、周辺の遺跡では、高崎遺跡第16次調査(註1)で１基、留ケ谷遺跡第１次調査で２基発見(註2)されている。年代は留ケ谷遺跡のものが古代ということが判明しているだけで、他は不明である。今回検出したＳＫ1361の年代については、出土した土器が古代のものとしか判

明しておらず、機能していた年代は不明である。

Ⅲ．まとめ

1　調査の結果、掘立柱建物２棟、土壙１基を発見した。

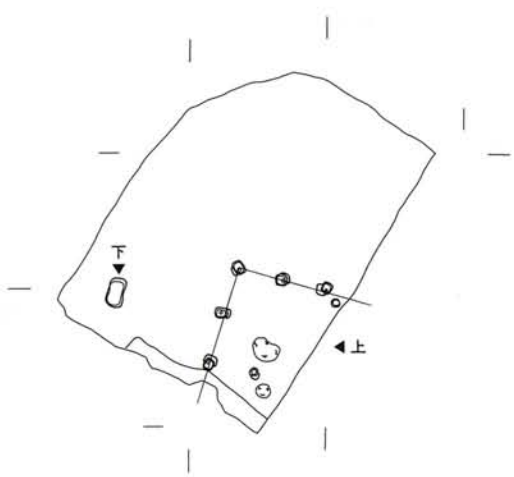
2　遺構の年代は、掘立柱建物、土壙とも不明である。

3　土壙は焼成遺構の可能性が考えられる。

参考文献「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会編　1997
（註１）　多賀城市教育委員会『高崎遺跡第13～16次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第42集　1996
（註２）　多賀城市教育委員会『留ケ谷遺跡第１・３次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第48集　1996

ＳＢ1360（ａ・ｂ）　完堀状況

ＳＫ1361　完堀状況



2. 第 24 次 調 査

Ⅰ. 調査に至る経緯

本調査は、個人住宅建築に係るものである。隣接地では第13次調査（平成６年度）、第20次調査（平成８年度）をそれぞれ実施し、溝や土壙、掘立柱建物等を発見している。また、対象区内には、分布調査でも土塁状の高まりを確認している。さらに、建築計画についても地山を削り取る工法のため事前調査が必要と判断した。発掘調査は10月23日から開始した。はじめに重機を使って表土除去を行い、翌日より作業員を動員して遺構確認作業に入る。土塁を２条発見し、溝状のくぼみをはさんで南北方向に延びて行くことが判明した。29日平面図作成時に必要な基準点を設定した。調査は土塁に堆積した土を除去した後、遺構の写真撮影を行った。遺構の平面図及び調査区内の地形測量を行った後、直ちに積土の状況を見るため土塁を断ち割った。11月14日土塁は大きく２層の積土で構成されていることがわかり、さらに積土状況から２つの土塁は同時期に構築されたことも明らかになった。土塁に挟まれた溝の堆積土を除去後、土層断面に小さな溝状のくぼみを発見した。そのため、事前調査の対象となる積土をすべて除去することにした。11月28日積土を除去後、東西方向に延びる小溝を多数発見した。新旧を確認し、堆積土を掘り下げた。12月５日写真撮影、平面図を作成しすべての調査を終了した。

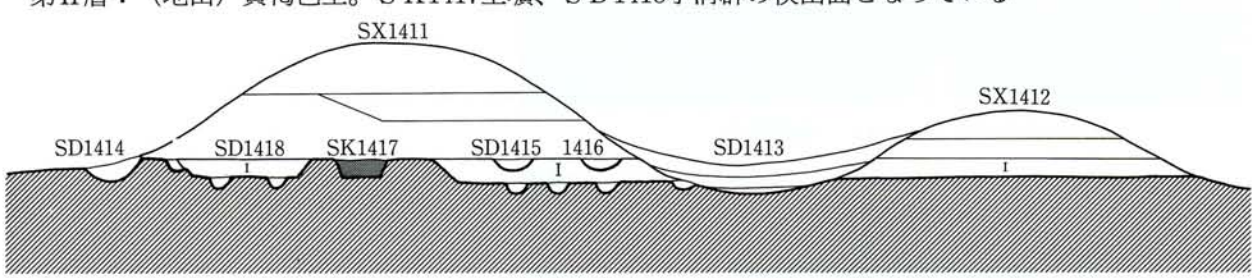
Ⅱ. 調査成果

(1) 層序

模式図から簡単に説明する。

第Ⅰ層：黄褐明色の砂層である。灰白色火山灰をブロック状に含む。調査区の東側に分布している。
　　土塁はこの直上から積み上げられている。

第Ⅱ層：（地山）黄褐色土。ＳＫ1417土壙、ＳＤ1418小溝群の検出面となっている



第６図　土層模式図

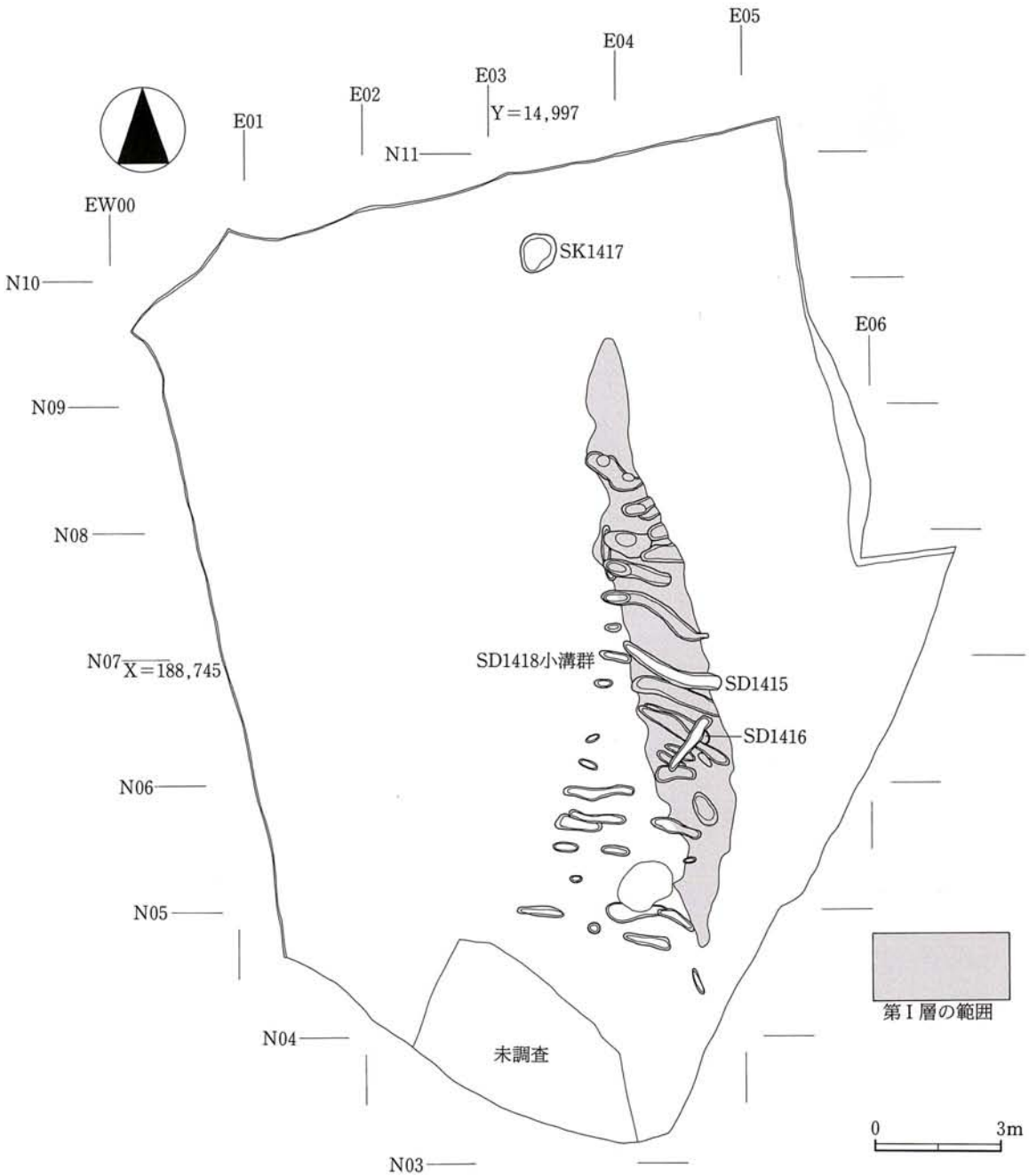
(2) 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は土塁２基、溝４条、土壙１基、小溝群である。これらの遺構は層序から第Ⅱ層(地山面)と第Ⅰ層に区分される。以下、古い順に概要を説明する。

第Ⅱ層検出遺構

ＳＫ1417土壙

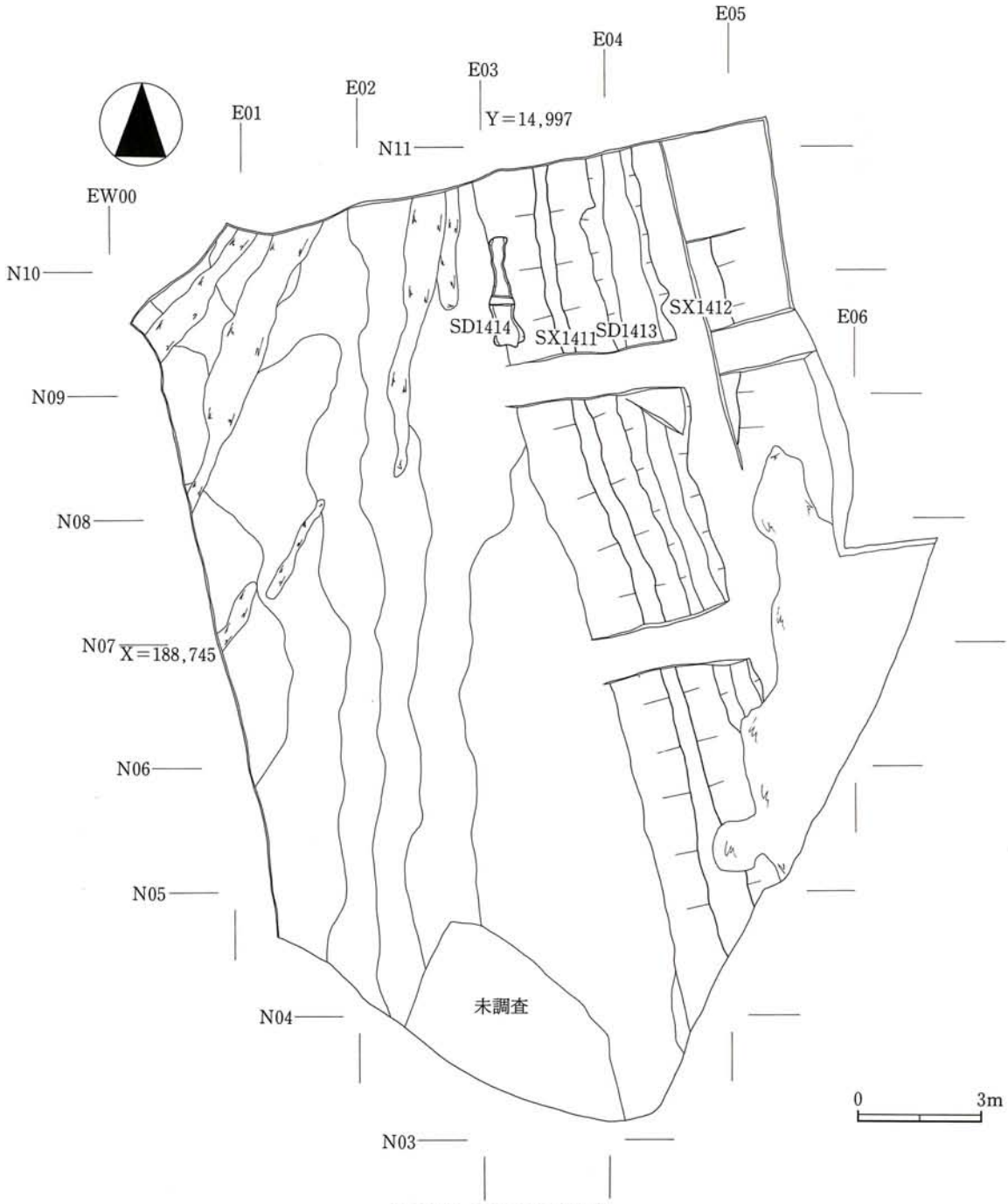
調査区北側ＳＸ1411土塁の積土を除去した後、地山上で発見した。平面形は楕円形である。規模は長辺１ｍ、短辺85cm、深さ６cmである。埋土は地山ブロックを含むしまりのある黄褐色土である。遺物は出土していない。



第７図　第Ⅱ層検出遺構

ＳＤ1418小溝群

ＳＸ1411土塁の積土を除去した後、調査区中央部から南側にかけて発見した。間隔は一定ではないが、ぼほ同一方向に延びる小溝群である。小溝群の中には、溝の東側をＳＤ1413溝によって破壊されているものがある。方向は東西と南北に向くものとがあり、前者がほとんどである。新旧は東西溝が新しい。中央付近で検出した東西溝には、西側の先端部が溝底部よりくぼんでいる箇所があり、溝の間15～35cmの間隔で見つかっている。規模は、比較的残りの良い状況で検出できた中央部の東西溝を見ると長さ1.65m、幅32～ 38cm、深さ６cmである。埋土は東西溝には明黄褐色土、南北溝は黄橙色土の単一層である。層中には、粒子の大きな円礫や地山粒子を含んでいる。遺物は須恵器杯・甕・瓶、平瓦が出土している。

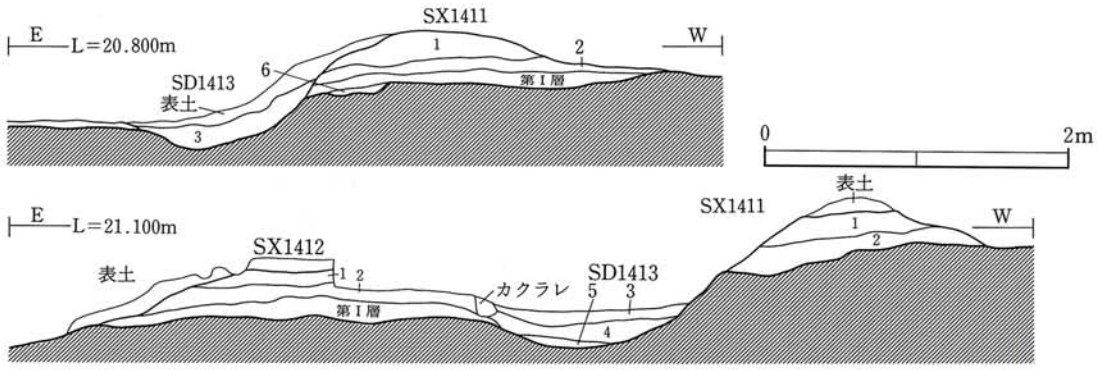


第8図　第Ⅰ層検出遺構

第Ⅰ層検出の遺構

ＳＸ1411土塁

調査区北東側で発見した。土塁は調査区の南北を縦断しており、長さ約24m以上である。ＳＤ1414より古い。方向は北で約３度西に偏している。規模は基底部幅1.75～2.37m、高さは30～37cmである。また、西と東では約20cmの比高差が認められた。積土は、上からにぶい黄褐色土と褐色土の二層が、平均15cmの厚さで積み上げられていた。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦が出土している。



番号	土色	土性・混入物	備考	番号	土色	土性・混入物	備考
1	10YR4/4褐色	地山ブロックを含む	SX1411・1412埋土	4	10YR4/3にぶい黄褐色	地山粒子を若干含む	SD1413埋土
2	10YR5/4にぶい黄褐色	地山、炭化物粒子を若干含む	〃	5	10YR5/3にぶい黄褐色	地山粒子を多量に含む	〃
3	10YR3/3暗褐色	比較的均質	SD1413埋土	6	10YR7/6明黄褐色	地山粒子、円礫を若干含む	SD1418小溝群埋土

第9図　SX1411・1412、SD1413土層堆積状況

ＳＸ1412土塁

調査区北東側で発見した。ＳＤ1413の東側に位置する南北方向の土塁である。南側は後世の土取りのため破壊されている。規模は長さ約9.6m以上で基底部幅2.67m、高さは20cmである。積土はにぶい黄褐色土と褐色土が平均10cmの厚さで水平に積み上げられていた。遺物は土師器杯、須恵器杯が出土している。

ＳＤ1413溝

ＳＸ1411土塁とＳＸ1412土塁の間に位置する南北溝である。南側は土取りため破壊されている。規模は長さ約14m以上で、幅1.4m、深さ24cmである。埋土は３層に細分されるが色調、土質から２層に大別できる。上層は不純物をあまり含まない暗褐色土、下層には地山粒子を含んだ黄褐色土が堆積している。遺物は平瓦が出土している。

ＳＤ1414溝

調査区北側ＳＸ1411土塁の西側を掘りこんだ南北溝である。規模は長さ約2.6m、幅25～70cm、深さは残りの良い所で６cmである。埋土は地山粒子を含んだ黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ1415溝

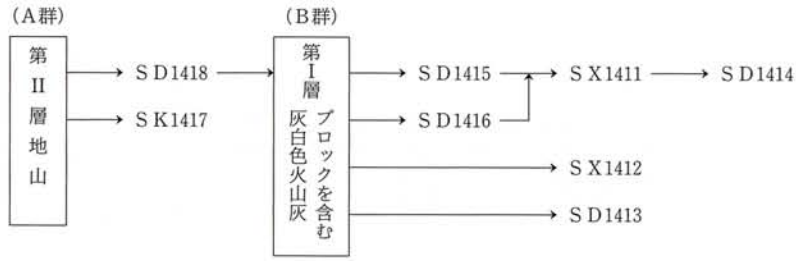
ＳＸ1411土塁の積土を除去した後、調査区中央部で発見した東西溝である。溝の東側はＳＤ1413溝によって破壊されており、規模は長さ2.4mまで検出し幅30～40cm、深さは残りの良い所で４cmである。埋土は炭化物や地山粒子を含む黄褐色土である。遺物は須恵器甕が出土している。

ＳＤ1416溝

ＳＸ1411土塁の積土を除去した後、ＳＤ1415溝の南側で発見した南北溝である。規模は長さ1.57m、幅20～32cm、深さは残りの良い所で６cmである。埋土は炭化物や地山粒子を含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

(3)　遺構の年代

今回の調査によって発見された遺構は土塁２基、土壙１基、溝４条、小溝群である。これらの遺構を整理すると以下のようになる。



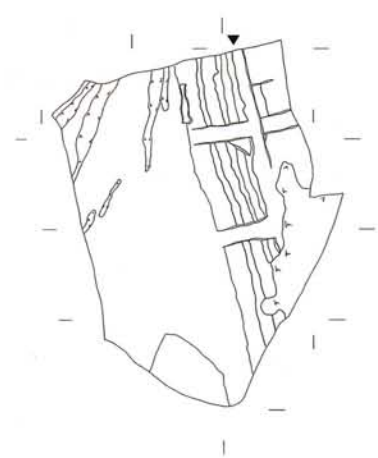
これらの関係から第II層検出遺構（A群）と第I層検出遺構（B群）に大別できる。A群に属する遺構にはSK1417土壙、SD1418小溝群があり、B群に属する遺構にはSX1411・1412土塁、SD1413～1416溝がある。A群から見ると、SK1417とSD1418は、土塁の積土を除去後、地山上で発見した。SK1417は第II層との関係は不明だが、SD1418と同時期に機能していたと考えられる。SD1418は間隔は一定ではないが、同一方向で構成される溝である。このような溝は市川橋・山王・新田遺跡でも検出しているが、高崎遺跡では初めての発見である。性格は畑の跡と考えられる。

次にB群の遺構は、新旧関係からSD1415・1416はSX1411土塁より古く、SD1414が新しいことが判明しており、三時期の変遷が確認できた。SX1411・1412とSD1413は、土塁の間にSD1413があり、新旧関係も確認できなかったため、これらは一連のものと考えられる。性格は、何らかの区画施設と推察される。遺構群の年代は、10世紀前葉(註)に降下したと考えられる灰白色火山灰をブロック状に含む第I層からA群は降下以前、B群は降下以降となる。このことからSK1417とSD1418は10世紀前葉以前、SX1411・1412、SD1413～1416はそれ以降となる。しかし、A群の下限、B群の上限については手がかりとなる資料がないため、年代は不明である。

III. まとめ

1　調査の結果、土塁2基、溝4条、土壙1基、小溝群を発見した。
2　遺構の年代には土廣、小溝群は10世紀前葉以前、土塁2基、溝4条はそれ以降である。
3　小溝群は畑の跡と考えられる。
4　土塁とSD1413は一連のものであり、何らかの区画施設と思われる。

（註）　白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要　VII』1980
白鳥良一「第VII章　考察(2)土器」宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡本文編』1982
柳沢和明「III　第61次調査」宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992



SX1411—1412（断ち割り状況）北より

3. 第 23 次 調 査

Ⅰ. 調査に至る経緯

本調査区は、高崎遺跡のほぼ中央部にあたり、留ケ谷遺跡に隣接した場所である。現況は、畑である。

今回の調査は、宅地造成計画の届出があり、対象面積約2500㎡の内302㎡について確認調査を行ったものである。

Ⅱ. 調査成果

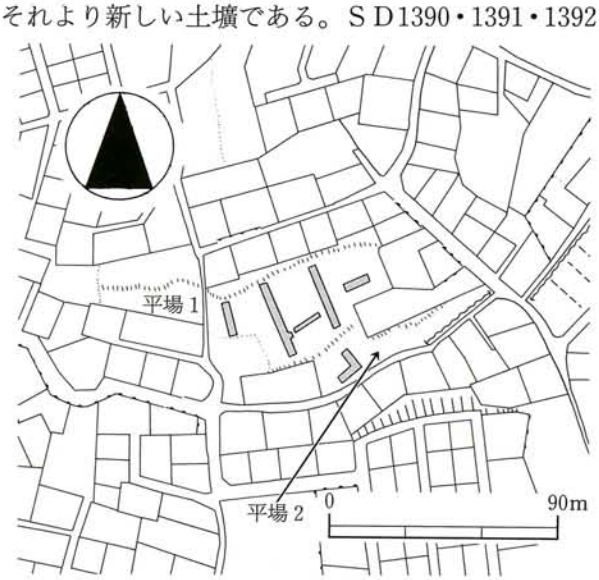
今回の調査区は丘陵南斜面にあり、地表面観察によると南北約36m、東西72m以上の上段平場(平場１)と、南北約12m東西約105mの下段平場（平場２）とが認められる。(第１図) 平場１には南北トレンチ３本、東西トレンチ２本、平場２にはＬ字型のトレンチ１本を設定した。調査の性格上、遺構の平面プランを検出したにすぎず、詳細な調査は行っていない。発見した遺構は、竪穴住居３棟、溝７条、土壙３基、小柱穴を含むピット92基である。遺物は全て堆積層から出土したものである。以下、各トレンチごとに遺構・遺物について概要を説明する。

トレンチ１　表土を除去すると直ちに地山面が現れ、この上面で溝２条、ピット21基を検出した。ＳＤ1386は調査区中央部で発見した東西溝である。規模は長さ３m以上、幅1.1～1.4mであり、方向は東で約12度北に偏している。ＳＤ1387は調査区南端部で発見した南北溝である。規模は長さ約３m、幅60～80cmであり、方向は北で約７度西に偏している。

遺物は、施釉陶器水滴(図版３)、無釉陶器甕等が出土している。施釉陶器水滴は注口部分が欠損しているがほぼ完形である。無釉陶器甕は口縁部の破片であり、内面にうすい灰釉が認められる。

トレンチ２　表土を除去すると、調査区北半部では直ちに地山面が現れるが、南半部では整地層が現れた。地山面では竪穴住居１棟、土壙１基、ピット６基を検出し、整地層上面では溝３条、土壙１基、小柱穴を含むピット22基を検出した。ＳＩ1388はトレンチ中央部で発見した竪穴住居である。東辺は2.5m以上、北辺は2.2m以上である。ＳＫ1389はＳＩ1388と重複し、それより新しい土壙である。ＳＤ1390・1391・1392

調査区遠景



第１図　調査区位置図

は調査区南半部で発見した東西溝である。規模はいずれも長さ約３m、幅約40～60cmである。方向はＳＤ1390が、西で約13度北に偏しており、ＳＤ1391・1392が、西で約10度北に偏している。ＳＫ1393は南半部で発見した不整形の土壙である。長径で見ると約1.2mの規模である。

遺物は青磁碗、施釉陶器卸皿（図版６－ｂ）・折縁深皿（図版６－ａ）・丸皿、鉄釉花瓶、須恵器杯、砥石、黒曜石剝離細片等が出土している。青磁碗は体部破片であり、連弁文が施されている。施釉陶器卸皿は内外両面に灰釉が施され、底部に卸目が認められる。折縁深皿は口縁部と体部破片であり、内外両面に灰釉が施されている。丸皿は底部破片であり、断面が三角形の低い高台が付き、内外両面に灰釉が施釉されている。須恵器杯は底部破片でヘラ書きがある。

トレンチ３　表土を除去すると、調査区北側では旧表土と見られる黒褐色土層が現われ、中央から南側では直ちに地山面が現れた。これらの上面で竪穴住居１棟、土壙１基、小柱穴を含むピット21基を検出した。ＳＩ1394は調査区中央で発見した竪穴住居である。北辺は2.5m以上、東辺は4.6mである。ＳＫ1395は調査区北東端で発見した不整形の土壙である。

遺物は、青磁碗・盤（図版４）、施釉陶器丸皿、鉄釉花瓶、無釉陶器甕（図版５－ａ）、重弁蓮華文軒丸瓦、円盤状土製品等が出土している。青磁碗は口縁部・体部・底部の破片が出土し、体部破片には連弁文が施されている。これらは釉調から２個体以上と見られる。青磁盤は内面底部に魚の浮文があり、双魚の一部と見られる。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を使用したものである。

トレンチ４　表土を除去すると旧表土と見られる黒褐色土層が現われ、調査区北端部では、この上面でＳＩ1396竪穴住居を１棟検出した。規模は東辺が2.5m以上であり、長さ1.9mの煙道がある。

遺物は、無釉陶器甕・擂鉢（図版５－ｂ）、施釉陶器花盆（図版６－ｃ）、土師器高台付杯、砥石等が出土している。無釉陶器甕は口縁部片であり、欠損しているが縁帯が下方に長く発達したタイプである。施釉陶器花盆は体部にヘラ描きによる模様が施された破片である。無釉陶器擂鉢・甕は底部片である。

トレンチ５　表土を除去すると直ちに地山面が現れ、この上面で溝２条と小柱穴を含むピット13基を検出した。ＳＤ1397は調査区中央部から西端にかけてのびる東西溝である。西壁際で屈曲し、南側に延びている。規模は長さ5.3m以上、幅20～110cmであり、方向は東で約27度北に偏している。ＳＤ1398は調査区東端部で発見した。規模は長さ約2.4m以上、幅30～70cmであり、方向は北で約30度西に偏している。

遺物は、須恵器杯、円盤状土製品、砥石等が出土した。須恵器杯は、底部がヘラ切りのもの、ヘラ切りの後手持ちヘラケズリを施したもの等がある。円盤状土製品は須恵器甕の体部片を使用したものである。

トレンチ６　表土を除去すると直ちに地山面に達し、この上面で小柱穴を含むピット９基を検出した。

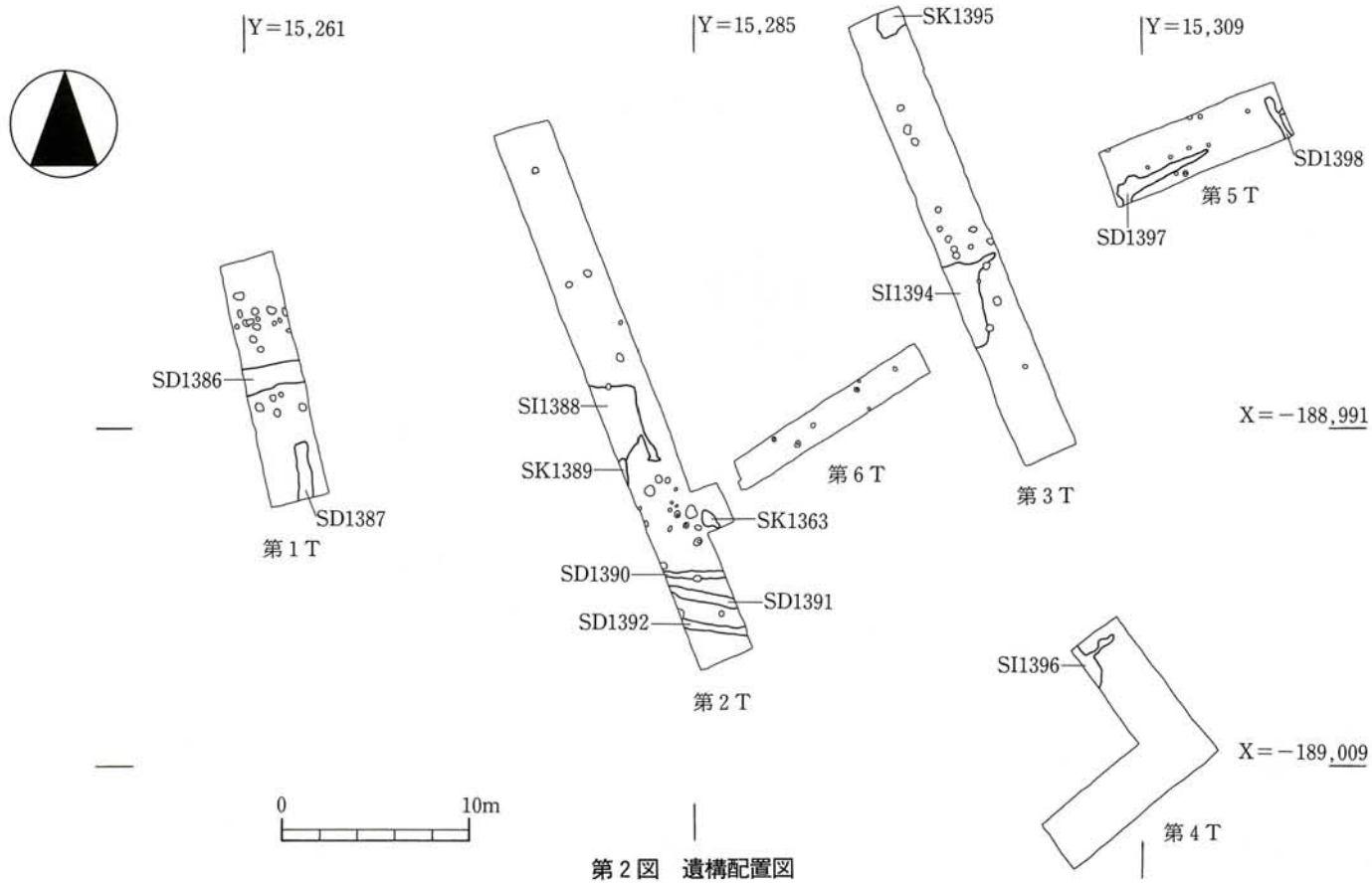
遺物は土師器甕、須恵器杯が出土している。土師器甕はロクロ調整をおこなったもので、須恵器杯は底部が手持ちケズリされたものである。

Ⅲ．まとめ

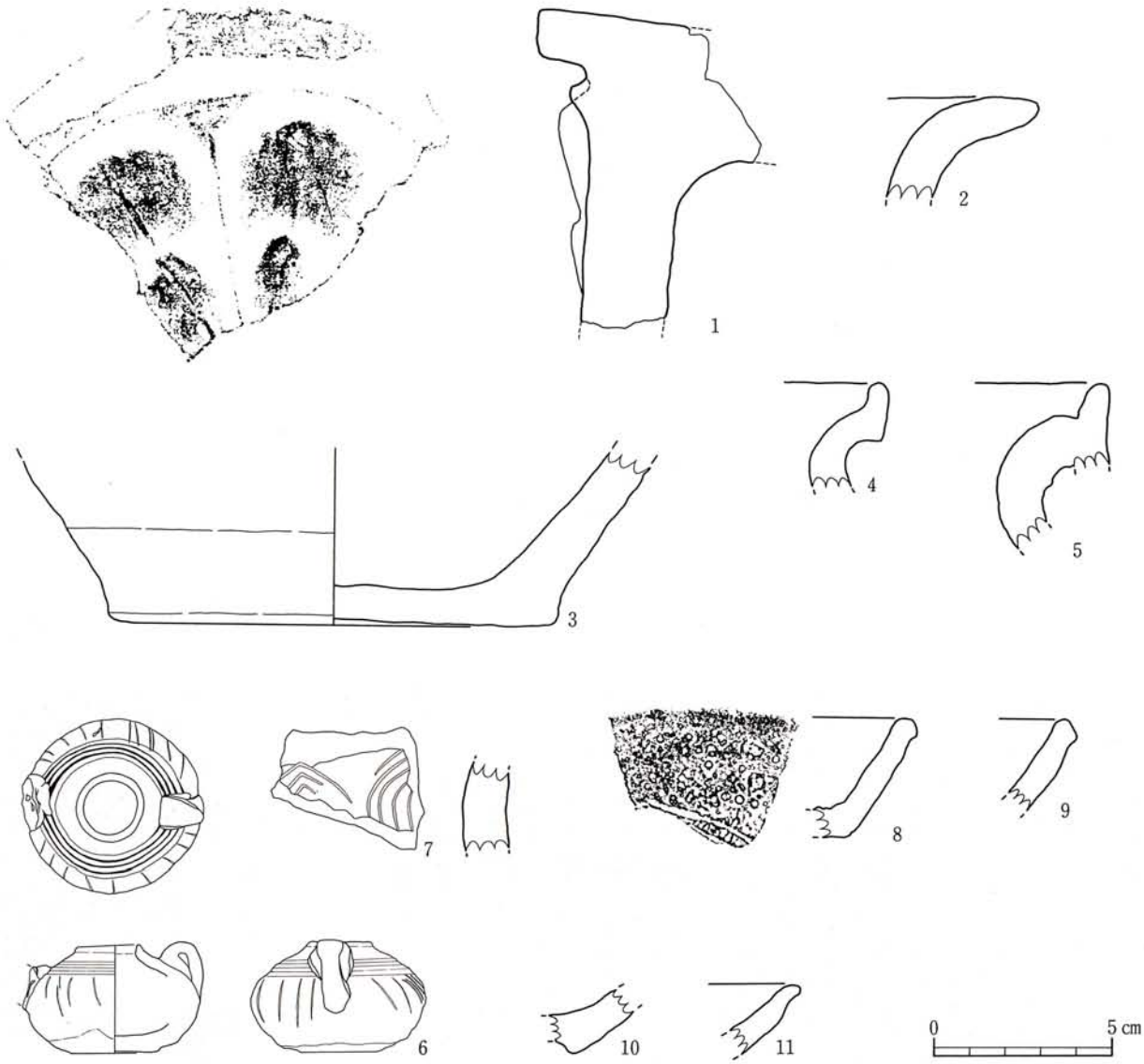
１　丘陵南斜面の平場において、竪穴住居３棟、土壙３基、溝７条、小柱穴を含むピット92基を発見した。

２　出土遺物は、古代の土器・瓦と中世の陶磁器等があり、発見した遺構は古代から中世にかけての遺構と考えられる。

３　中世の遺物は12～16世紀の各時期のものがあり、この平場が中世全般にわたって使用されていた可能性がある。


Y=15,261
Y=15,285
Y=15,309
SK1395
SD1398
第5T
SD1397
SI1394
SD1386
SI1388
SK1389
第6T
第3T
X=−188,991
SD1387
第1T
SK1363
SD1390
SD1391
SD1392
第2T
SI1396
X=−189,009
第4T
0
10m

第2図　遺構配置図



第３図　堆積層出土遺物

番号	種　類	地　区	層　位	特　徴	登録番号	備　考
1	軒丸瓦	第３トレンチ	L－III	重弁蓮華文	R－57	
2	無釉陶器甕	第１トレンチ	L－II	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、若干の灰釉ハケ塗り	R－45	渥美産、12世紀
3	無釉陶器播鉢	第４トレンチ	L－II	外面：ヨコナデ、内面：使用により摩滅	R－21	地元産、13・14世紀
4	無釉陶器甕	第３トレンチ	L－II	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ	R－34	常滑６ａ型式、13世紀第３四半期
5	無釉陶器甕	第４トレンチ	L－II	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ	R－25	常滑、15世紀前～中葉
6	施釉陶器水滴	第１トレンチ	L－II	外面：灰釉 口径1.8cm、底径2.5cm、器高3.1cm	R－６	古瀬戸中II期、14世紀前～中葉
7	施釉陶器花盆	第４トレンチ	L－II	外面：灰釉、内面：摩滅	R－46	古瀬戸中Ｉ orII期、14世紀前～中葉
8	施釉陶器卸皿	第２トレンチ	L－II	外面：うすい灰釉、ロクロナデ 内面：灰釉、卸目	R－17	古瀬戸前II期、13世紀前～中葉
9	施釉陶器卸皿	第２トレンチ	L－II	外面：うすい灰釉、ロクロナデ 内面：灰釉	R－20	古瀬戸前II期、13世紀前～中葉
10	施釉陶器丸皿	第２トレンチ	L－II	外面：灰釉、内面：灰釉	R－48	瀬戸・美濃系大窯、16世紀前～中葉
11	施釉陶器丸皿	第３トレンチ	L－II	外面：灰釉、内面：灰釉	R－10	瀬戸・美濃系大窯、16世紀前～中葉

堆積層出土遺物観察表

【観察表作成に使用した参考文献】

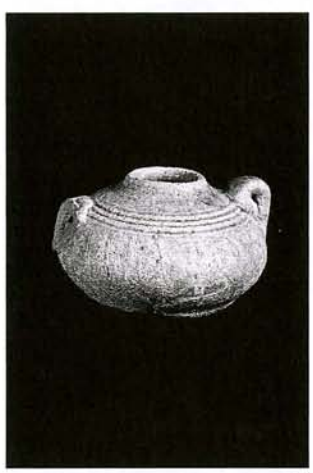
4　　中野晴久「常滑・渥美」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』（1995、真陽社）

６、７　㈶瀬戸市埋蔵文化財センター　藤澤良祐氏に御教示頂いた。

８、９　藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』（1996、㈶瀬戸市埋蔵文化財センター）

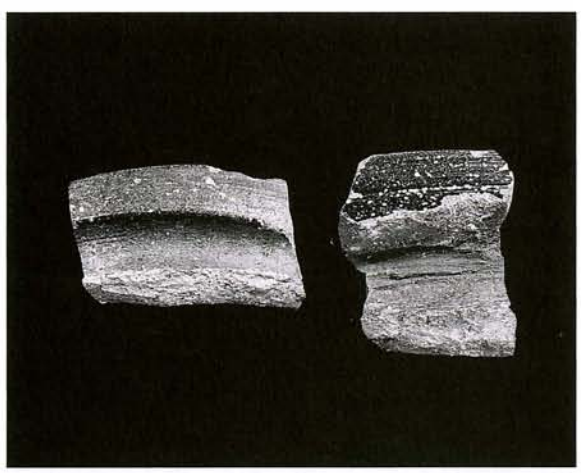
1

2

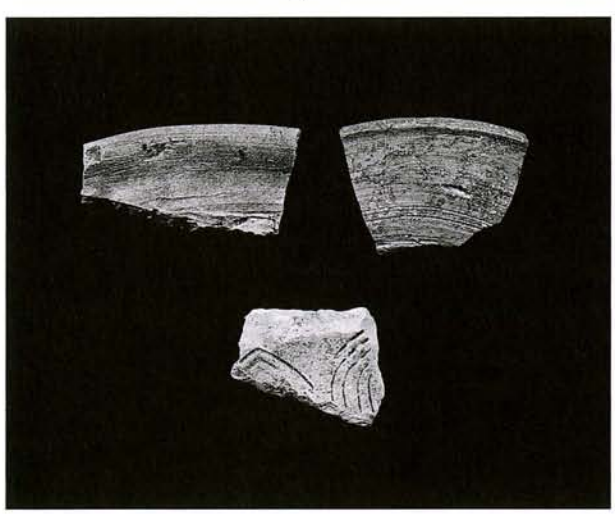


3

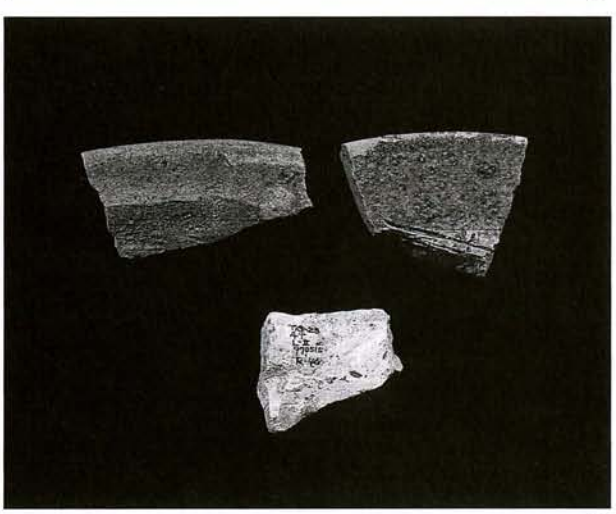
4



5



6



7

1　第1トレンチ（北西より）
2　第2トレンチ（南より）
3　水滴
4　青磁盤
5　無釉陶器
6　施釉陶器（外面）
7　施釉陶器（内面）

Ⅳ．東田中窪前遺跡

第 2 次 調 査

Ⅰ．調査に至る経緯

本調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として実施した。地権者より提示された開発計画の対象地は東田中窪前遺跡の北端に位置し、近接地の発掘調査（高崎遺跡第17次調査）においても古代・中世の遺構が発見されたことから、当該地にも同様の遺構が存在することが予想された。そのため、発掘調査の実施について地権者と協議を行い、同意が得られたので調査実施に至った。調査は、擁壁設置により地下遺構が損なわれる14㎡を対象とした。

第１図　調査区位置図

Ⅱ．調査成果

発見した遺構は、竪穴住居３棟、溝１条、土壙１基である。検出面はすべて地山である。以下、遺構ごとに説明する。

ＳＩ05竪穴住居

調査区南西隅で発見した。かなりの削平をうけており、北西隅と北東隅のみの発見であった。ほかの遺構との重複はない。貼床、周溝とも発見していない。規模は北辺で2.7mである。埋土は暗褐色土を主体としている。遺物は土師器甕と須恵器杯の小片が出土している。

ＳＩ06竪穴住居

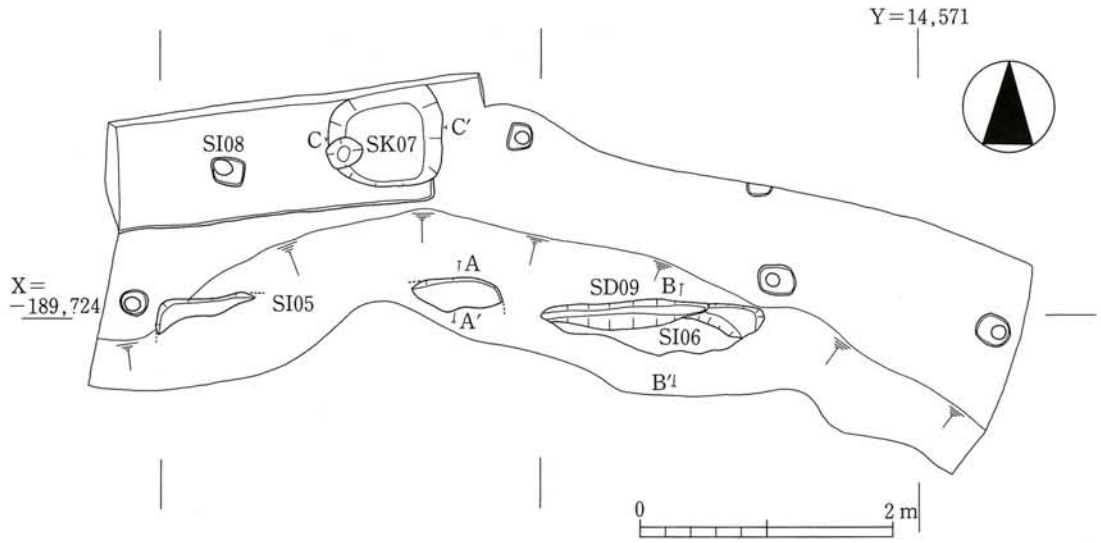
調査区の中央で発見した。かなりの削平をうけている。ＳＤ09と重複があり、これよりも古い。規模は北辺が1.98m以上である。貼床と周溝を確認した。周溝の規模は上幅18～24cm、下幅６cm、深さ８cmである。断面形はＶ字状をなす。埋土は褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＩ08竪穴住居

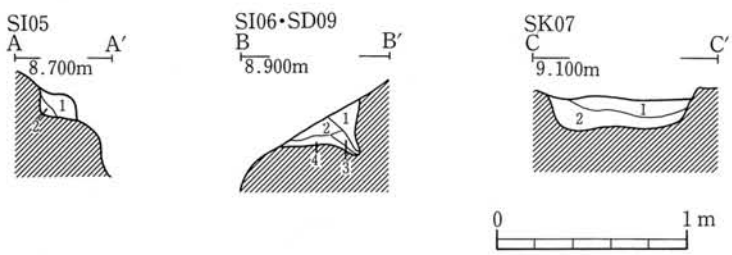
調査区東端で発見した。ＳＫ07と重複し、これよりも古い。規模は南辺2.52m以上、東辺0.84m以上である。貼床、周溝は認められない。埋土は褐色土を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕の小片が出土している。

ＳＤ09溝

調査区の中央で発見した溝跡である。ＳＩ06と重複し、これよりも新しい。規模は上幅12cm、下幅５cm、深さ29cmで断面形はＶ字状である。遺物は出土していない。



第２図　遺構全体図



遺物観察表

番号	土　色	備　考
ＳＩ05		
1	暗褐色土（7.5YR3/4）	
2	暗褐色土（10YR3/4）	
ＳＫ07		
1	暗褐色土（10YR3/4）	
2	暗褐色土（10YR3/2）	
ＳＩ06　ＳＤ09		
1	褐色土（10YR4/4）	ＳＤ09
2	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ＳＩ06埋土
3	灰黄褐色土（10YR4/2）	ＳＩ06周溝埋土
4	にぶい黄褐色土（10YR5/4）	ＳＩ06貼床

ＳＫ07土壙

調査区北西部で発見した土壙である。ＳＩ08と重複し、これよりも新しい。規模は直径0.92mである。

埋土は暗褐色を基調としており、第２層は黄褐色地山ブロックを含んでいる。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕、赤焼き土器が出土している。

Ⅲ．まとめ

1　竪穴住居３棟、溝１条、土壙１基を発見した。

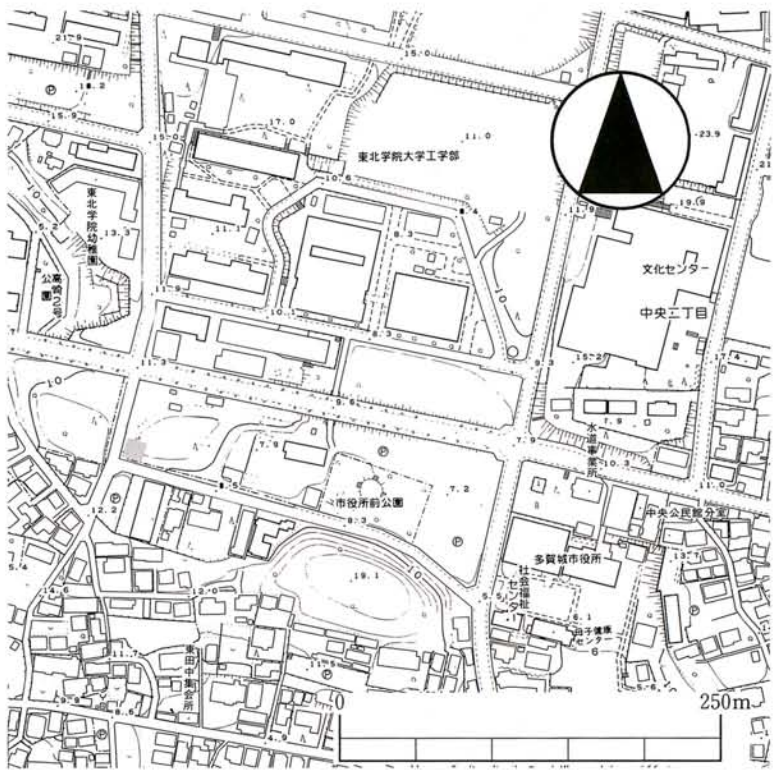
2　遺構の年代については、竪穴住居が概ね奈良・平安時代、溝・土壙・小柱穴については平安時代以降と考えられる。

調査区全景

Ⅴ．稲荷殿地区試掘調査

Ⅰ．調査に至る経緯

本調査は、多賀城駅前開発事業に伴う代替地として稲荷殿古墳の西側に隣接する土地を宅地造成する計画が出されたため、遺構の有無を確認する目的で行った。



第１図　調査区位置図

Ⅱ．調査成果

遺構は、溝４条と柱穴３基で、全て地山面で発見した。遺物は堆積層から土師器、近世磁器がみつかっているがいずれも小破片で数点である。

(1)　ＳＤ01溝

ＳＤ01は、調査区北西端部で発見した東西溝である。西側は調査区外へ延びる。規模は、長さ1.2m以上、上幅18cm、下幅８cm、深さ６cmである。埋土は黄褐色土である。遺物は出土していない。

(2)　ＳＤ02溝

ＳＤ02は、調査区北側で発見した東西溝である。北端は調査区外に延びる。規模は、長さ6.8m以上、上幅1.3m、下幅1.3m、深さ16cmである。埋土は黄橙色土である。

(3)　ＳＤ03溝

ＳＤ03は、調査区北側で発見した東西溝である。規模は、長さ30cm、上幅60cm、下幅40cm、深さ５cmである。埋土は黄橙色土である。遺物は出土していない。

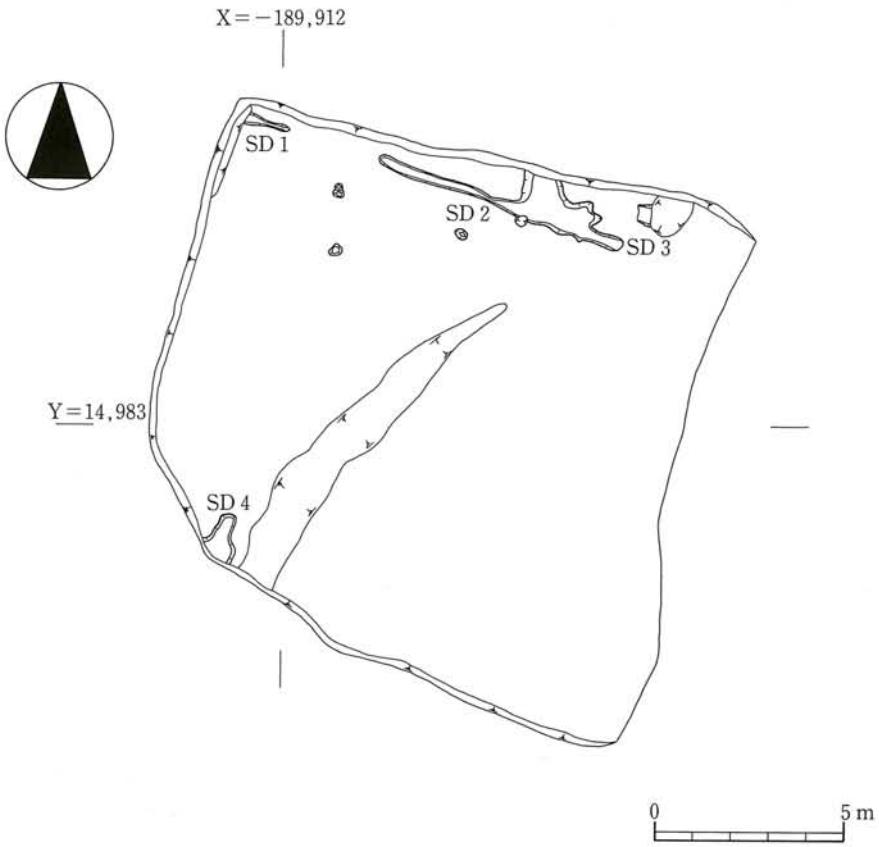
(4)　ＳＤ04溝

ＳＤ04は、調査区南西隅で発見した南北溝である。規模は、長さ1.2m、上幅80cm、下幅65cm、深さ４cmである。埋土は黄橙色土である。遺物は出土していない。

Ⅲ．まとめ

１　本調査区で見つかった遺構は溝跡４条、柱穴３基である。

２　本調査区では、古墳に直接関連のある遺構は発見できなかった。



第２図　遺構配置図

調査区全景（南東より）

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせきほか
書名	高崎遺跡ほか
副書名	山王遺跡　市川橋遺跡　東田中窪前遺跡　稲荷殿地区
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	石川俊英・高橋圭蔵・武田健市・鈴木孝行・車田　敦
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－1
発行年月日	西暦1999年３月26日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山王（第31次）	多賀城市南宮字伊勢214-1、215-1、216-1、212-1	18	013	38度17分56秒	140度58分29秒	19961129～19961213	150㎡	公園建設
市川橋（第16・20次）	多賀城市市川字新西久保場内	18	008	38度18分10秒	140度58分53秒	1996050～19960607	200㎡	道路拡幅
市川橋（第22次）	多賀城市浮島字高原51	18	008	38度17分49秒	140度59分41秒	19961007～19961029	280㎡	給食センター増設
高崎（第20次）	多賀城市高崎１丁目117-10・11	18	018	38度17分58秒	141度00分14秒	19961028～19961120	200㎡	宅地造成
高崎（第24次）	多賀城市高崎１丁目117-3	18	018	38度17分58秒	141度00分16秒	19971023～19971205	300㎡	宅地造成
高崎（第23次）	多賀城市留ケ谷１丁目320-1、323-1、325-4・5・6	18	018	38度17分05秒	141度00分29秒	19970507～19970605	302㎡	宅地造成
東田中窪前（第２次）	多賀城市高崎二丁目1-6	18	037	38度17分24秒	140度59分29秒	19970520～19970529	14㎡	土留擁壁
稲荷殿地区（試掘）	多賀城市中央２丁目地内	18	044	38度17分29秒	141度00分17秒	19971021～19971027	200㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王（第31次）	集落	古代	掘立柱建物、溝、土壙	瓦質土器	
市川橋（第16・20次）	集落	古代	水田、溝		
市川橋（第22次）	集落				
高崎（第20次）	集落	古代	掘立柱建物、土壙		
高崎（第24次）	集落	古代～中世	溝、土壙、畑、土塁	瓦	
高崎（第23次）	集落	古代～中世	竪穴住居、溝、土壙	青磁、中世陶器、瓦	
東田中窪前（第２次）	散布地館	古代	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		
稲荷殿地区（試掘）		不明	溝	近世磁器	

多賀城市文化財調査報告書第56集

高崎遺跡ほか

山王遺跡　市川橋遺跡
東田中窪前遺跡　稲荷殿地区

平成11年3月26日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368－0134
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368－1141
印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町4－5
電話（022）288－6123